

「あなたへ。」

東京農業大学第一高等学校中等部 三年 丹保 系

まだ義務教育も終えていない私が紛れもない挫折感を覚えたのは、今から半年前のことだった。中学受験が終わり趣味にいそしむことが解禁され、私は色々なことに手をつけ始めた。絵、ダンス、文学、とりわけ歌唱は私を構成する最も大切な要素となり、とても上手とはいえないものの私は歌うことに熱中した。

私はそのうち、家の前の川を越えた場所にあるミュージカルスクールに通うことにした。歌うことも踊ることも演技することまで私の目にはまばゆいものに映ったのだ。それに私は根拠のない自信すら持ち合わせ、心のどこかですぐに上手くなつて輝かしい舞台に立つ自分の想像さえしていた。周りをあつと言わせる才能があるかもしれないと、まだ見ぬ舞台の世界への期待だけが胸の中で膨らんだ。

ところが、そんな私を襲ったのが救いようのない現実だった。自分よりいくつも歳下の小さな子が自分よりはるかにきびきびと動いている。よく通る幼い声で、しっかりと歌を歌っている。大きな図体を縮こまらせて掠れた裏声で歌う自分の姿は惨めとしか言いようがなかった。初めの頃はまだ始めて日が浅いから、と誰に言うでもなく言い訳していた。それが二ヶ月、半年と過ぎていき、小さな子供達の中でまならない踊りと歌を繰り広げることにもはや言い訳もできず、隠しようのない羞恥を感じていた。その子達は何年も前から始めているのだから当たり前だ、と母は言った。当たり前だったのだ。レッスンについていけなくなろうが、失望した講師から目に見えて粗雑な扱いを受けようが。レッスンの最中は皆、各々が演じたことのある舞台のＴシャツを着ているが、私は当然そんなものは持っておらず、黒い布に真っ白な円が描いてあるＴシャツを着た。多分、夜空に浮かんだ満月なのだろうと陳腐な感想を抱き、陰鬱な気持ちで川を越える橋を渡った。思い描いていた情景とあまりに乖離した現実能耐えられなくなり、心が折れそうになる日々だった。しかし変に真面目な性分であった私は頑なに逃げるのが嫌いだった。ここで自分に負けて逃げ出すなど、あつてはならないことだと思った。家を出る前にこぼす溜め息は数え切れなかったし、向かっている時からあまりの緊張でえずいたりすることも少なくなかった。

きっかけは些細なことだった。中学三年生になり年齢の都合でクラスがひとつ上に上がり、週に一度だったレッスンは二度になった。ある演技のレッスンで、私は振替で来ていた歌もダンスも達者な子とペアになった。そこで突きつけられたのは、圧倒的な差。今まで自分が積み上げて来たものが馬鹿馬鹿しいと思えるほど、その差は歴然だった。こんな私とペアでごめんね、と言ってしまいたかったが、明るくていい子を体現したようなその子は終始笑顔でいてくれて、そんな卑屈なことは冗談でも言えなかった。

レッスンは終わりとみんなと別れて一人になった帰り道、諦めようと心に決めた。月の光よりよっぽど明るい街灯に照らされ、川は静かに揺れていた。潮時だと思った。今から逃れたいという思いでいっぱい、最初の頃の純粋な向上心はもはや頭に浮かばなかった。だというのに、私は涙が止まらなかった。ごめんなさい、ごめんなさいと心の中で謝り続けた。逃げずにしようとした努力を踏み躪られた過去の私へ、好きなものを苦い過去として受け止め続けなければならない未来の私へ、謝らなければならぬ今の私へ。きっと、月の浮かんだＴシャツは着られなくなってしまっただろう。嫌な思い出の一部として筆笥の肥やしに成り果てるのだ。本当は挫折なんて高尚なものでもないのかもしれない。ただかた四歳の人生経験なんて言葉で片付けられるかもしれない。でも、逃げた自分を、確かにあった努力を、思い出なんかにしたくない。だから私は言葉にしようと思った。私が私に贈る、最初で最後のはなむけに。